

秋山図

芥川龍之介

青空文庫

「——黄大癡こうたいちといえ、大癡だいちの秋山図しゅうざんずをご覧らんになったことがありますか？」
ある秋よの夜、甌香閣おうこうかくを訪ねた王石谷おうせきこくは、主人の惲南田うなんでんと茶を啜すすりながら、話のついでにこんな問を發した。

「いや、見たことはありません。あなたはご覧になったのですか？」
大癡老人黄公望こうこうぼうは、梅道人ばいどうじんや黄鶴山樵こうかくさんしやうとともに、元朝げんちやうの画の神手しんしゅである。
惲南田はこう言いながら、かつて見た沙磧図させきずや富春卷ふうしゅんかんが、髣髴ほうふつと眼底に浮ぶような気がした。

「さあ、それが見たと言つて好いか、見ないと言つて好いか、不思議なことになっているのですが、——」

「見たと言つて好いか、見ないと言つて好いか、——」
惲南田は訝いぶしように、王石谷の顔へ眼めをやった。

「模本もほんでもご覧になったのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。とにかく真蹟しんせきは見たのですが、——それも私わたしばかりではありません。この秋山図のことについては、煙客先生えんかくせんせい（王時敏おうじびん）や廉州れんしゅう

先生（王鑑）も、それぞれ因縁（いんねん）がおりなのです」

王石谷はまた茶を啜（の）つた後、考（かん）深（えぶ）そうに微笑した。

「ご退屈でなければ話しましょうか？」

「どうぞ」

惲南田は銅鑒（どうけい）の火を掻き立ててから、慇懃（いんぎん）に客を促した。

*

*

*

元宰先生（董其昌）が在世（ざいせい）中のことです。ある年の秋先生は、煙客翁（えんかくおう）と画論をしている内に、ふと翁に、黄一峯（こういつほう）の秋山図を見たかと尋ねました。翁はご承知のとおり画事の上では、大癡（だいし）を宗（そう）としていた人です。ですから大癡の画という画はいやしくも人間（じんかん）にある限り、看（み）つく言（い）つてもかまいません。が、その秋山図という画ばかりは、ついに見たことがないのです。

「いや、見るどころか、名を聞いたこともないくらいです」

煙客翁はそう答えながら、妙（めづ）に恥（は）しいような気がしたそうです。

「では機会のあり次第、ぜひ一度は見ておきなさい。夏山図かざんずや浮嵐図ふらんずに比べると、また一段と出色しゅっしょくの作です。おそらくは大癡老人たいちの諸本の中でも、白眉はくびではないかと思ひますよ」

「そんな傑作ですか？ それはぜひ見たいものですが、いったい誰が持っているのです？」
 「潤州じゅんしゅうの張氏ちやうしの家にあるのです。金山寺きんざんじへでも行つた時に、門を叩たたいてご覧らんなさい。私が紹介状を書いて上げます」

煙客翁えんかくおうは先生の手簡てもかんを貰もらうと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろそういう妙画めいがを蔵している家ですから、そこへ行けば黄一峯こういつぽうの外ほかにも、まだいろいろ歴代れきだいの墨ぼく妙めうを見るうことができるに違ちがひない。——こう思つた煙客翁は、もう一刻も西園さいえんの書房に、じつとしてゐることはできないような、落着かない気もちになつてゐたのです。

ところが潤州へ来て観みると、楽しみにしてゐた張氏の家というのは、なるほど構かまえは広そうですが、いかにも荒れ果ててゐるのです。牆かきには蔦つたが絡からんでゐるし、庭には草が茂さかつてゐる。その中に鷄にわとりや家鴨あひるなどが、客の来たのを珍めづしそうに眺ながめてゐるといふ始末はじまつですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名画があるのだらうかと、一時は元宰げんさい先生せんせいの言葉が疑うたがはたくなつたくらいでした。しかしわざわざ尋ねて来ながら、刺しも通とぜずに帰るのは、

もちろん本望^{ほんもう}ではありません。そこで取次ぎに出て来た小厮^{しょうし}に、ともかくも黄一峯の秋山図を拝見したいという、遠来の意を伝えた後^{のち}、思白^{しはく}先生が書いてくれた紹介状を渡ししました。

すると間もなく煙客翁は、^{ちようどう}庁堂へ案内されました。ここも紫檀^{したん}の椅子^{いす}机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃^{ほこり}の臭い^{にお}がする、――やはり荒廢^{こうはい}の気が鋪氈^{ほせん}の上に、漂っているとも言いそうなのです。しかし幸い出て来た主人は、病弱らしい顔はしていても、人からの悪い人ではありません。いや、むしろその蒼白^{あおしろ}い顔や華奢^{きやしや}な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるような人物なのです。翁はこの主人とひととおり、初対面^{あひさ}の挨拶をすませると、早速名高い黄一峯を見せていただきたいと言いました。何でも翁の話では、その名画がどういう訳か、今の内に急いで見ておかないと、霧のように消えて도しまいそうな、迷信じみた気もちがしたのだそうです。

主人はすぐに快諾^{かいだく}しました。そうしてその庁堂の素壁^{そへき}へ、一幀^{いつとう}の画幅^{がふく}を懸^かけさせました。

「これがお望みの秋山図です」

煙客翁^{えんかくおう}はその画^えを一目見ると、思わず驚嘆^{きようたん}の声を洩^もらしました。

画は青緑せいりよくの設色せつしよくです。溪たにの水が委蛇いゐと流れたところに、村落や小橋しょうきようが散在している、——その上に起した主峯の腹には、ゆうゆうとした秋の雲が、蛤粉げふんの濃淡を重ねています。山は高房山こうぼうざんの横点おうてんを重ねた、新雨しんうを経たような翠黛すゐたいですが、それがまたしゆを点じた、所々しよしよの叢林そうりんの紅葉こうようと映発している美しさは、ほとんど何と形容して好いか、言葉の着けようさえありません。こういうとただ華麗かれいな画のようですが、布置ふちも雄大を尽していれば、筆墨ひつぼくも渾厚こんこうを極めていゝる、——いわば爛然らんぜんとした色彩うちの中に、空靈くうれいたん澹蕩たんとうの古趣おのずみなぎが自ら漲おのっているような画なのです。

煙客翁はまるで放心したように、いつまでもこの画を見入っていました。が、画は見えていれば見えているほど、ますます神妙を加えて行きます。

「いかがです？ お氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜ななめに翁の顔を眺めました。

「神品しんぴんです。元宰げんさい先生せんせいの絶賞は、たとい及ばないことがあつても、過ぎていゝるとは言われません。實際この図に比べれば、私わたしが今までに見た諸名本は、ことごとく下風かふうにあるくらいです」

煙客翁はこういう間あいだでも、秋山図しゅうざんずから眼を放しませんでした。

「そうですか？　ほんとうにそんな傑作ですか？」

翁は思わず主人のほうへ、驚いた眼を転じました。

「なぜまたそれがご不審なのですか？」

「いや、別に不審という訳ではないのですが、実は、——」

主人はほとんど処子しよしのように、当惑そうな顔を赤めました。が、やっと寂しい微笑を洩すと、おずおず壁上の名画を見ながら、こう言葉を続けるのです。

「実はあの画を眺めるたびに、私は何だか眼を明いたまま、夢でも見ているような気がするのです。なるほど秋山しゅうざんは美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？　私以外の人間には、平凡な画が図とに過ぎないのではないか？——なぜかそういう疑いが、始終私を悩ませるのです。これは私の気の迷いか、あるいはあの画が世の中にあるには、あまり美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、とにかく妙な気がしますから、ついあなたのご賞讃にも、念を押すようなことになったのです」

しかしその時の煙客翁は、こういう主人の弁解にも、格別心は止めなかったそうです。それは何も秋山図に、見惚みとれていたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑か識しに疎うしろいのを隠したさに、胡乱うろんの言を並べるとしか、受け取れなかったからなのです。

翁はそれからしばらくの後、この廃宅同様な張氏ちやうしの家を辞しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覚めるような秋山図しゅうざんずです。実際大癡たいちの法ほ

燈とうを継いだ煙客翁えんかくおうの身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたと思

つたでしょう。のみならず翁は蒐集家しゅうしゅうかです。しかし家藏の墨妙うちの中でも、黄金二十

鎰いづに換えたという、李營丘りえいきゆうの山陰泛雪図さんいんはんせつずでさえ、秋山図の神趣に比べると、遜色そんしよく

のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代きだいの黄一峯こういつぽうが欲しくてた

まらなくなつたのです。

そこで潤州じゆんしゆうにいる間に、翁は人を張氏に遣つかわして、秋山図を譲ってもらいたいとい

何度も交渉してみました。が、張氏はどうしても、翁の相談に応じません。あの顔色かおいろの

蒼白あおしろい主人は、使に立つたものの話によると、「それほどこの画がお気に入つたのなら、

喜んで先生にお貸し申そう。しかし手離すことだけは、ごめん蒙こうむりたい」と言つたそうで

す。それがまた氣を負つた煙客翁には、多少癩かんにも障さわりました。何、今貸してもらわなく

ても、いつかはきつと手に入れてみせる。——翁はそう心に期ごしながら、とうとう秋山図

を残したなり、潤州を去ることになりました。

それからまた一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ来たついでに、張氏の家を訪れてみまし

た。すると牆に絡んだ蔦や庭に茂った草の色は、以前とさらに変わりません。が、取次ぎの小廝に聞けば、主人は不在だということです。翁は主人に会わないにしろ、もう一度あの秋山図を見せてもらうように頼みました。しかし何度頼んでも、小廝は主人の留守を楯に、頑として奥へ通しません。いや、しまいには門を鎖したまま、返事さえくくしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家のどこかに、蔵している名画を想いながら、惆悵と独り帰つて来ました。

ところがその後元宰先生に会々と、先生は翁に張氏の家には、大癡の秋山図があるばかりか、沈石田の雨夜止宿図や自寿図のような傑作も、残っているということを告げました。

「前にお話するのを忘れたが、この二つは秋山図同様、※苑の奇観とも言うべき作です。もう一度私が手紙を書くから、ぜひこれも見ておきなさい」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札の外にも、それらの名画を購うべき橐金を授けられていたのです。しかし張氏は前のとおり、どうしても黄一峯だけは、手離すことを肯じません。翁はついに秋山図には意を絶つより外はなくなりました。

*

*

*

王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです」

「では煙客先生だけは、たしかに秋山図を見られたのですか？」

暉南田は髯を撫しながら、念を押すように王石谷を見た。

「先生は見たと言われるのです。が、たしかに見られたのかどうか、それは誰にもわかりません」

「しかしお話の容子では、——」

「まあ先をお聴きください。しまいまでお聴きくだされば、また自ら私とは違ったお考が出るかもしれません」

王石谷は今度は茶も啜らずに、々と話を続けだした。

*

*

*

煙客翁が私にこの話を聴かせたのは、始めて秋山図を見た時から、すでに五十年近い星霜を経過した後だったのです。その時は元宰先生も、とうに物故してしまひ、張氏の家でもいつの間にか、三度まで代が變つていました。ですからあの秋山図も、今は誰の家に蔵されているか、いや、未だ龜玉の毀れもないか、それさえ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるように、秋山図の靈妙を話してから、残念そうにこう言つたものです。

「あの黄一峯は公孫大嬢の劍器のようなものでしたよ。筆墨はあつても、筆墨は見えない。ただ何とも言えない神氣が、ただちに心に迫つて来るのです。——ちようど龍翔の看はあつても、人や劍が我々に見えないのと同じことですよ」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動きだしたのを潮に、私は独り南方へ、旅をすることになりました。そこで翁にその話をする、と、

「ではちようど好い機会だから、秋山を尋ねてご覧なさい。あれがもう一度世に出れば、画苑の慶事ですよ」と言うのです。

私ももちろん望むところですから、早速翁を煩わせて、手紙を一本書いてもらいました。

が、さて遊歴ゆうれきの途とに上つてみると、何かと行く所も多いものですから、容易じゆんしゅうに潤州じゆんしゅうの張氏ちやうしの家を訪れる暇ひまがありません。私は翁おうの書そでを袖そでにしたなり、とうとう子規ほととぎすが啼なくようになるまで、秋山しゅうざんを尋ねずにしまいました。

その内にふと耳にはいったのは、貴戚きせきの王氏おうしが秋山図しゅうざんずを手に入れたという噂うわさです。そういえば私わたしが遊歴中えんかくちゆう、煙客翁えんかくおうの書を見せた人には、王氏ちやうしを知っているものも交まじつていました。王氏ちやうしはそういう人からでも、あの秋山図しゅうざんずが、張氏ちやうしの家に蔵してあることを知つたのでしよう。何でも坊間ぼうかんの説によれば、張氏ちやうしの孫は王氏おうしの使を受けると、伝家の彝鼎いいていや法書とともに、すぐさま大癡たいちの秋山図しゅうざんずを獻けんじに來たとかいうことです。そうして王氏ちやうしは喜びのあまり、張氏ちやうしの孫を上座に招じて、家姫かきを出したり、音楽を奏したり、盛な饗宴きやうえんを催もよほしたあげく、千金を寿じゆにしたとかいうことです。私はほとんど雀躍じゃくやくしました。滄そうそ桑五十載うごじっさいを閱けみした後のちでも、秋山図しゅうざんずはやはり無事だったのです。のみならず私も面識めんしきがある、王氏ちやうしの手中に入つたのです。昔は煙客翁えんかくおうがいくら苦心をしても、この図を再び看みることは、鬼神きしんが悪むのかと思うくらい、ことごとく失敗に終わりました。が、今は王氏ちやうしの焦しょう慮りよも待たず、自然しぜんとこの図が我々の前へ、蜃楼しんろうのように現れたのです。これこそ實際天縁てんえんが、熟じやくしたと言う外ほかはありません。私は取る物も取りあえず、金きんしやうにある王氏ちやうしの

第宅^{ていたく}へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはつきり覚えていますが、それは王氏の庭の牡丹^{ぼたん}が、玉欄^{ぎよくらん}の外^{そと}に咲き誇った、風のない初夏の午過ぎ^{ひるす}です。私は王氏の顔を見ると、揖^{ゆう}もすますかすまさない内に、思わず笑いだしてしまいました。

「もう秋山図はこちらの物です。煙客先生もあの図では、ずいぶん苦勞をされたものです。が、今度こそはご安心なさるでしょう。そう思うだけでも愉快です」

王氏も得意満面でした。

「今日は煙客先生や廉州^{れんしゅう}先生も来られるはずですが、まあ、お出でになった順に、あなたから見てもらいましょう」

王氏は早速かたわらの壁に、あの秋山図を懸^かけさせました。水に臨んだ紅葉^{こうよう}の村、谷^{うず}を埋^{うめ}めている白雲^{はくうん}の群^{むれ}、それから遠近^{おちこち}に側立^{そばだ}った、屏風^{びょうぶ}のような数峯^{せい}の青、——たちまち私の眼の前には、大癡老人が造りだした、天地よりもさらに靈妙な小天地が浮び上ったのです。私は胸を躍^{おど}らせながら、じつと壁上の面を眺めました。

この雲煙邱壑^{うんえんきゅうがく}は、紛れもない黄一峯^{こういつほう}です、癡翁^{ちおう}を除いては何人も、これほど皴^し点^{ゆんでん}を加えながら、しかも墨を活^いかすことは——これほど設色^{せつしよく}を重くしながら、し

かも筆が隠れないことは、できないのに違いありません。しかし——しかしこの秋山図は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たという図と、たしかに別な黄一峯こういつぽうです。そうしてその秋山図しゅうざんずよりも、おそらくは下位にある黄一峯です。

私の周囲には王氏を始め、座にい合せた食客しょくかくたちが、私の顔色かおいろを窺うかがっていました。ですから私は失望の色が、寸分すんぶんも顔へ露あらわれないように、気を使う必要があつたのです。が、いくら努めてみても、どこか不服な表情が、我知らず外へ出たのでしょう。王氏はしばらくたつてから、心配そうに私へ声をかけました。

「どうですか？」

私は言下ごんかに答えました。

「神品です。なるほどこれでは煙客先生えんかくが、驚倒きやうとうされたのも不思議はありません」
王氏はやや顔色を直しました。が、それでもまだ眉まゆの間には、いくぶんか私の賞讃しょうざんに、不満らしい気色けしきが見えたものです。

そこへちようど来合せたのは、私に秋山の神趣を説いた、あの煙客先生です。翁は王氏に会釈えしやくをする間まも、嬉しそうな微笑を浮べていました。

「五十年前ぜんに秋山図を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日はまたこういう富貴ふうき

のお宅に、再びこの図とめぐり合いました。まことに意外な因縁です」

煙客翁はこう言いながら、壁上の大癡たいちを仰ぎ見ました。この秋山がかつて翁の見た秋山かどうか、それはもちろん誰よりも翁自身が明らかに知っているはずで、ですから私も王氏同様、翁がこの図を眺める容子ようすに、注意深い眼を注いでいました。すると果然翁かぜんの顔も、みるみる曇ったではありませんか。

しばらく沈黙が続いた後のち、王氏はいよいよ不安そうに、おずおず翁へ声をかけました。

「どうです？ 今も石谷先生せきこくは、たいそう褒めてくれましたが、――」

私は正直な煙客翁が、有体ありていな返事をしはしないかと、内心冷や冷やしていました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も気の毒だったのでしよう。翁は秋山を見終ると、
叮嚀ていねいに王氏へ答えました。

「これがお手にはいったのは、あなたのご運が好いのです。ご家蔵かぞうの諸宝しよほうもこの後は、一段と光彩を添えることでしょう」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顔の憂色ゆうしよくが、ますます深くなるばかりです。

その時もし廉州先生れんしゅうが、遅れ馳せおくばにでも来なかつたなら、我々はさらに気まずい思

いをさせられたに違いありません。しかし先生は幸いにも、煙客翁の賞讃が洩りがちになった時、快活に一座へ加わりました。

「これがお話の秋山図ですか？」

先生は無造作な挨拶をしてから、黄一峯の画に對しました。そうしてしばらくは黙然と、口髭ばかり嚙んでいました。

「煙客先生は五十年前にも、一度この図をご覧になったそうです」

王氏はいつそう気づかわしように、こう説明を加えました。廉州先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされたことがなかったのです。

「どうでしょう？ あなたの鑑裁は」

先生は歎息を洩らしたがり、不相変画を眺めていました。

「ご遠慮のないところを伺いたいのですが、——」

王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。

「これですか？ これは——」

廉州先生はまた口を噤みました。

「これは？」

「これは癡翁^{ちほう}第一の名作でしょう。——この雲煙の濃淡をご覧なさい。元氣淋漓^{りんり}じゃありませんか。林木なぞの設^{せつ}色^{しよく}も、まさに天造^{てんぞう}とも称すべきものです。あすこに遠峯^{えんぱう}が一つ見えましよう。全体の布局^{ふきよく}があのために、どのくらい活^いきているかわかりません」

今まで黙っていた廉州先生は、王氏のほうを顧^{かえり}みると、いちいち画^えの佳所^{かしょ}を指さしながら、盛^{さかん}に感歎^{かんたん}の声を挙げ始めました。その言葉とともに王氏の顔が、だんだん晴れやかになりだしたのは、申し上げるまでもありますまい。

私はその間^{あいだ}に煙客翁と、ひそかに顔を見合せました。

「先生、これがあの秋山図ですか？」

私が小声^{こせい}にこう言うと、煙客翁は頭を振りながら、妙^{まばた}な瞬^{まばた}きを一つしました。

「まるで万事が夢のようです。ことによるとあの張家^{ちやうけ}の主人は、狐仙^{こせん}か何かだったかもしれませんよ」

*

*

*

「秋山図の話はこれだけです」

王石谷は語り終ると、おもむろに一碗の茶を啜すすった。

「なるほど、不思議な話です」

惲南田うんなんでんは、さつきから銅鑒どうけいの焰ほのおを眺めていた。

「その後王ご氏も熱心に、いろいろ尋ねてみたそうですが、やはり癡翁の秋山図と言えば、あれ以外に張氏も知らなかったそうです。ですから昔煙客先生が見られたという秋山図は、今でもどこかに隠れているか、あるいはそれが先生の記憶の間違いに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山図を見に行かれたことが、全体幻まぼろしでもありますまいし、——」

「しかし煙客先生えんかくせんせいの心の中には、その怪しい秋山図が、はつきり残っているのですよ。それからあなたの心の中なかにも、——」

「山石の青緑だの紅葉しゆの色だのは、今でもありあり見えるようです」

「では秋山図がないにしても、憾うらむところはないではありませんか？」

惲王うんおうの両大家は、掌たなごころうを拊うって一笑した。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集28芥川龍之介集」集英社

1972（昭和47）年9月8日発行

入力：j.utyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月15日公開

2009年9月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋山図

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>